

[書評] Sharika Thiranagama, In my mother's house -- civil war in Sri Lanka

著者	荒井 悦代
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	54
号	2
ページ	146-148
発行年	2013-06
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/1248

Sharika Thiranagama,

In My Mother's House: Civil War in Sri Lanka.

Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2011,
xvi+296pp.

あら い えつ よ
荒 井 悦 代

I 全体像

スリランカで、本書の著者のシャリカ・ティラナガマを知る人は少ないが、その母親ラジニを知る人は少なくないだろう。かつてタミル・イーラム解放の虎 (LTTE) をはじめとするタミル・ミリタント活動を社会変革につながると信じ活動に参加したものの、非人道的な活動に疑問をもち、袂を分かった、ジャフナ大学医学部教授にして人権活動家であり、1989年に自宅前でLTTEの銃弾に斃れたラジニである^(注1)。

本書は、戦争や暴力的な事件によって故郷ジャフナを追われた人々について、個人、家族、コミュニティの側面からそれぞれの心理、感情、社会的な風景やイデオロギーの変容を丹念に追っている。

II 内容紹介

イントロダクションでは、紛争を研究するうえで見落とされがちな個人や家族、コミュニティに焦点を当てる意味を明らかにする。紛争研究ではインパクトの大きな事件 (スリランカのケースでは強制立ち退き) や暴力的な非日常が対象となりがちである。たしかに、内戦中のジャフナにおいてタミル住民およびムスリム住民らは想像を絶する暴力に晒されていた^(注2)。紛争は長引き、人々はそのなかで生活せざるを得ず、行為主体としての個人・家族、コミュニティも変化せざるを得なかった。個々の行為主体はそれぞれ様々な歴史や事情を抱えており、紛争下の変化も様々であった。著者はインタビューを

通して民族紛争の鳥瞰図を描こうとする。

各章では特定の集団ごとに分析を進めていくが、著者が分析の軸とするのはスリランカのタミル社会 (タミル、ムスリム) の血縁関係である。彼らにとって血縁関係は経済的にも社会生活を営むにも必要不可欠と見なされており、家族への愛情も深い。しかし、男性の長老をトップとするシステムは女性や若者の献身と犠牲の上に成り立っており、タミル・ミリタントらの運動の発端はこの制度への不満にあった。著者は、このシステムが紛争という非日常と暴力、大規模な強制立ち退きと長期にわたるキャンプ生活のなかで、どのような意味をもつに至ったか、特に弱い立場にあった女性や若い世代にどのような変化が生じたか、インタビューを通した調査によって明らかにしている。

既存のタミル・ミリタントに関する多くの研究は、LTTEに焦点を当てている。たしかにLTTEは「タミルの唯一の代表」を自任していた。しかし、LTTEが「タミルの唯一の代表」となったのは、他グループの活動家を暴力的に排除した結果であった。1980年代、ミリタント運動には多数のグループが存在し、LTTEはそのひとつに過ぎなかった。本書では、運動の大多数を占めた非LTTEメンバーへのインタビューを行っていることも特徴的である。

本書が特徴的な点は、著者自身がジャフナのタミル人であり、強制立ち退きは経験したことがないものの、母親をテロで亡くしており、他の研究者よりもタミル人コミュニティに容易に溶け込むことができたことである。ジャフナ出身のタミル人たちのなかにはかつてLTTE以外のミリタントに属していた人々も多く存在し、LTTEへの恐怖をいまだに捨て切れていない。ジャフナ時代のことやミリタント活動に関する話題になるとよそ者には口をつぐんでしまう。なぜならLTTEのシンパからスパイ扱いされないとも限らないからであり、これは紛争の遺物のひとつである。その点、著者は反LTTE、反スリランカ政府という旗色が鮮明であった。一方、他のタミル人研究者はどうしても怖さからLTTEに追従的になり、非タミル人研究者はフィールド調査を行うにあたりLTTEに協力を求めざるを得ず、記述に偏りがみられていた。

各章は、以下のとおりである。

第1章「戦争のなかで成長すること、自我形成、

人格とLTTE」では、1990年代にジャフナで青春期を過ごしたタミル人へのインタビューをもとに構成されている。1980年代後半以降のジャフナでは戦争が当たり前の状況になっていた。日常生活もままならないため、伝統的な生活様式や価値の継続ができなくなっていた。家族のなかで当然引き継ぐとされていた土地や資産を失い、当然あると期待していた未来がなくなり人々は何を信じていいかわからなくなっていた。その隙間にLTTEが巧みに入り込んでいった。タミル人たちが強制退去やLTTE下の生活について多くを語らないことも強調される。ムスリムが、LTTEを恐れずに人前でも語るのとは大きく異なる。

第2章「秘密の家、母親・娘と相続」で描かれるのは、紛争に翻弄されたタミル人の女性である。1983年の「暗黒の7月」と呼ばれるコロombo暴動で家を焼かれ、父と兄を失う。ジャフナに移住後、もう1人の兄はミリタントとして命を落とす。女性は自らもミリタント活動に従事した経験をもつものの、活動に失望し、ジャフナから追われるようにして母とともにコロomboに戻る。娘たちに家を残したい一心で暴動の記憶が残る土地に新しい家を建て、生活を再開させた。歴史に翻弄されながら、家族がどのようにして喪失に向き合い、秘密や記憶を蓄積し、消化したのか。そして将来に向けて生きるために何をしたのか、を追っている。

第3章「ムスリムから北のムスリムへ、民族性、立ち退き」は、章の前半ではスリランカにおけるムスリムの歴史や地位について述べられる。1990年、イーラム独立国家をもくろむLTTEはムスリム住民の北部5県からの即時退去を命じる。ムスリムはダウリー（持参金）によって金品や土地を母から娘に受け継ぐことをアイデンティティのひとつとしていたが、現金や貴重品の持ち出しもままならならずそれができなくなった。退去させられたムスリムたちはブッタラムなどで暮らすことになった。著者はこれらのムスリム住民らをスリランカの政治システムのなかで認識されている（利益を代表する政党をもつ）、東部のムスリムやコロomboなどの都市部（南部）のムスリムと区別して、忘れ去られた「北のムスリム」であるとして、取り上げている。

第4章「北のムスリム、立ち退き後の未来」では、長期にわたる退去先での集団避難生活では、経

済的苦境だけでなく、移転先のムスリム住民との対立にも直面せざるを得なかった。タミルと異なり、紛争が一段落しても故郷に戻ることでできないムスリムは、ダウリーを娘に引き継ぐためにも移転先で土地を買い、家を築く。その一方で帰郷を熱望し、苦しんでいる。しかし、移転先で育った若い世代は、故郷に思い入れがない。むしろ、いつ帰れるかわからない、帰る場所もないかもしれない故郷を思い描いて日々暮らすよりも、現在の生活に足場を固めて、未来を具体的に想定した方が生きやすい。見通しの立たない生活ほど苦しいものはないからだ。

第5章「戦闘が日常の世代」は、1980年代に若者が社会変革を求めてミリタント運動に身を捧げ、失望していったさまが描かれる。女性たちも抑圧的な家族制度からの解放を求めミリタントとして立ち上がったものの、LTTEなどがかえって保守的な家族制度を擬した支配システムを作り上げる、という矛盾に直面したことを明らかにしている。

第6章「結語——コロombo・タミルから——」では、タミル人にとってコロomboとはどんな場所だったか、歴史をさかのぼり、考察する。コロomboは、1983年の暴動や内戦中の、タミル人に対する嚴重なチェックポイントがあったことからマイノリティにとって居心地の悪い場所として連想されがちである。しかし、将来を求めて自発的に移動する人々にとって、可能性のある場所であることを示す。

Ⅲ 本書の貢献

2009年の内戦終結時、スリランカでは極端な人権侵害があったとされる^(註3)。国連をはじめとする国際社会がこれを問題視し、スリランカ政府に対処を求めている。スリランカ政府は、「過去の教訓・和解委員会」(LLRC)を任命し民族の融和を図っていると主張している。そして、現政権は経済的な発展を推し進めること、具体的にはインフラ整備や住宅建設を行い、生活水準を引き上げることに熱心である。しかし、それが民族融和に直接役に立つかは疑問である。なぜならば、タミルおよびムスリム住民を排除した地で、住民の帰還を許さないまま、事業が進められているからである。さらに本書の前書きでガナナート・オベセーカラが指摘するように、北部で仏教保護を前面に打ち出した政治が再現

するのではないかとの危惧もある。つまり、融和とはかけ離れた事態が進んでいるのである。

融和のためには、まずタミルや北のムスリムの声を聞くことが第一歩になってしかるべきである。かろうじてタミル国民連合（TNA）の政治家や海外ディアスポラが独自の組織を作り、声を上げる手段を獲得している。

しかし、戦争の影響をもっとも受けた北部の人々の声は、組織されていない。なぜなら、本書が丹念に追っているように、内戦中に故郷を奪われた人々は、家や生活の糧を失ったばかりでなく社会とのつながりや家族との関係をも失い、相互不信もあり、いまだにタミルとして、あるいはムスリムとしてまとまった意見をあげることもできないからである。

彼らが意見を表明できるようになるには時間がかかるだろう。それまで我慢強く待つ必要があることを考慮に入れるべきである。たしかに、スリランカ政府の復興政策は経済面に偏っているかもしれない。だからといって、人権政策の実施を矢継ぎ早に急かす国際社会のやりかたが適切とも言い難い。

また、融和となると、どうしてもタミルとシンハラの間が注目を浴びる。しかし、本書が明らかにするように、紛争中に生じたタミルとムスリムの関係も修復すべきである。タミル人とムスリムはどちらもタミル語を母語とし、ジャフナでは有機的に生活を営んできたことから、切り離さずに考える方が自然である。そして、紛争は北・東部において、ムスリムとタミルの関係を変化させたことから、戦後の東部での関係修復もまた課題となる。本書はこの点について目を開かせてくれた好著である。

本書は、部外者にとってわかりにくい、難民と

なったタミルとムスリムについて、内側から描いてみせた。外部から彼らを理解し、ともに前に進むための手がかりとなるに違いない。

本書を読み進むにつれ、どうしても、原発事故や津波によって故郷を離れ、家族がばらばらに暮らしている東北の人々と重ねざるを得なかった。背景は大きく違うものの、本書で用いられた手法や概念を用いて何らかの貢献できるのではないだろうか。

（注1）シャリカは、母とその姉の物語である“*No More Tears Sister: Anatomy of Hope and Betrayal*”というタイトルの映像クリップを作成している。YouTubeでも見ることができる。<http://www.youtube.com/watch?v=C803NOvmTqk>

（注2）ダニエル [2011] は、主としてイギリスへのタミル人移民の歴史をたどっているが、内戦初期のジャフナの記述もある。

（注3）内戦終結時の人権侵害については、<http://www.ide.go.jp/Japanese/Research/Region/Asia/Radar/20110531.html>（スリランカ内戦に関する国連専門家レポートの要約）を参照。

文献リスト

ダニエル, E.ヴァレンタイン 2011.「移民の苦しみのありか——悩める国家、阻害される人々——」アーサー・クライマンほか『他者の苦しみへの責任——ソーシャル・サファリングを知る——』みすず書房。

（アジア経済研究所地域研究センター）